

巻頭言  
Greeting

×

赤坂 泉

Izumi Akasaka  
聖書宣教会 主任牧師・校長

Profile

1959年生まれ。三重県伊勢市での16年余の教会奉仕を経て、2003年より聖書神学舎専任教師として奉職。今年度から主任牧師・校長となる。



## 主を知ることこそ

先行きの不透明感が増している昨今なのでしょう。環境の問題、国内外の政治や経済の動静、世界を覆う憎悪の連鎖。不透明感は人々の不安を煽り、強固な拠り所や連帯を志向させるように思えます。

ペテロの時代を想像することは容易ではありませんが、第一の手紙の関心である外側からの圧迫とともに、第二の手紙には教会内部の混乱を知らされます。にせ教師が現れ、滅びをもたらす異端を持ち込み、贖い主を否定しさえする。そうして教会を惑わし、神の民に混乱を来す。作り事のことば、むなしい大言壮語、誤った生き方を特徴とする者たちですから、識別できそうなものなのに、それを却けることができないというのは、時代の不透明感や不安のなせることだったか、などと想像します。

ともあれ、ペテロは読者のためにこう祈ります。「神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にありますように。」(2ペテロ1:2)主を知ることが鍵だということです。続けて3節で「主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与える」と教えます。福音を信じて神の民として生きている者は、その関心を主を知ることこそ集中すべきです。他にもっと大切なものがあるかのような惑わし、敬虔への別の道があるかのような教えに騙されることなく、主を知ること、です。いのちと敬虔に関する「すべてのことは」そこにあるのですから。さらに、地上の営みは結局「みな、くずれ落ちるものだ」とすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならな

いことでしょう」(3:11)と教えられます。地上の価値観に、神から与えられた基準を歪めさせてはなりません。移ろい行くこの世にあって、永遠不変の神の基準をもって生きることは、キリスト者の特権であり責務です。だから、主を知ることが何より大切にしたいのです。聖霊に動かされた人たちが語った神からのことば、聖書によって、主を知ること、主のみこころを知ること集中したいのです。時代がどのように変転しようとも、みことばに立って、神を愛し、隣人を愛して歩むのです。主を知ることが追求するキリスト者が、聖い、敬虔な生き方を貫くことが、その生かされている各々の場を照らし、整えて、神の恵みをもたらすことにつながるのです。

主を知ることこそが恵みと平安の鍵です。この思想が手紙の結語にまで貫かれていることを確認して、その祈りを共有したいと思います。

「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。このキリストに、栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。アーメン。」(3:18)

### No.170 Topics

- p02-03 羽鳥明先生を憶えて
- p04-05 キャラバン伝道報告
- p06 学びの窓
- p08 遠藤かおる先生のこと

# 「返さなければならぬ負債」

—息子的見地における父・羽鳥明の宣教スピリット—

「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも返さなければならぬ負債を負っています。」(ローマ二：二四)

私にとって「羽鳥明」というのは、単に父の名ではなく、いわば人生を支配するものでした。神学舎の入学試験のとき、舟喜信先生から「羽鳥明の息子、さすが、と言わせてくれよ」と言われたことは忘れられません。そんな例は日常茶飯事でした。いつも強いプレッシャーと同時に、特別扱いを受けてきました。それが父のキリスト教界での存在感の大きさということなのだと思えます。

父が日本のキリスト教界にインパクトを与え続けてきたことは疑い得ません。思うにそれは、父が教会の中で完結せず、いつも「この世」「救われるべき人々」に向き合い、働きかけることに心を砕いていたからに違いありません。教会の中だけの意見の違いや軋轢などは、福音を届けるべき「世」と対峙したとき、瑣末なことです。父は、生涯をかけて「世」と向き合い、「世」に対して「返すべき負債」を返し続けてきたのでしょ。

私は、両親が始めた家の教会の礼拝説教を十数年にわたって担当し続けています。父を前に説教をするのは神学舎の「説教演習」以来で、当初大変緊張しましたが、父は謙虚に受け止めてくれて、いつも感動でした。でも、一度、説教後に「主の十字架の福音が語られていない」とダメ出しをされたことがあります。その日は確か父と母と私の三人でした。父に十字架の福音を語るのには釈迦に説法のようにですが、いかに聖書に忠実であろうとも、説教にそれが含まれないことは、父にとつて看過できないことだったのでしよう。十字架の福音を含まない聖書の解説のなんと虚しいことか。それが父の生きざまでした。

神学舎の説教演習で私が父から学んだのは「ラポール」でした。「この人の話なら」と思わせる信頼関係です。父は、自分ほもとより、津々浦々の教会と「滅ぶべき人々」との「ラポール」構築に命懸けで取り組んでいた気がします。いかに巧みに福音を伝えても、聞こえなくても伝えなければ意味がないことを誰よりも知っていた人だったと思います。

聖書神学舎50周年記念礼拝(羽村にて)



初代 理事長・校長

## 羽鳥明先生を想う

高橋 陽子

Yoko Takahashi

浜田山キリスト教会員

米国での留学を終えられた羽鳥明先生は、東京神学塾のチャペルでご自分の使命を、電波による伝道と献身者に対する教育と訓練の充実への寄与と明かされました。さらに先生は私たち塾生を「兄弟と姉妹」と呼んで、どんな時にも福音を語る者となるようにと諭されました。神を愛する真摯な言葉は、信仰の後輩へのいましめであり励ましでありました。

その後しばらくして、羽鳥、舟喜、ホークの三先生と有志の方々の祈りに応えて、神様は聖書神学舎を発足させて下さいました。当時の教師たちは、理事長の明先生も校長の順一先生もみんな三十歳台の方々でした。この先生方と新入の一年生に加えて、閉じた神学塾からの二年生・三年生と共に神学舎の学びが開始しました。

明先生はその頃すでにPBAでのラジオ牧師として、あるいは国内諸地方での伝道説教者として、とても忙しく活躍しておられました。その中で三鷹台の舎屋での授業を受け持たれ、煩雑な庶務や財務の作業も担当されました。さらにその傍ら学生たちときめの細かい個人的な交わりも保たれて、親しく聴いては助言を与え、祈り合っておられました。

初夏が訪れた頃、祈祷のための一泊の教師会が葉山で行われました。直接伝道者の育成を目ざす神学舎の建学の理念を確認しつつ祈りが重ねられた集会でした。一人ひとりの学生のために執り成しの祈りがささげられていく中で、特に一人の学生のためにあつい祈りの必要が示されました。この人は直接伝道から離れようとしていたのです。明先生はこの時教師としてのご自身のありようを悔い改められ、涙してこの学生の思いのために執り成されました。この時の明先生と諸先生のご様子を私は今でも忘れられません。

今、御国にゆかれた明先生を想うとき、志を与えそれを成し遂げさせて下さる主のご真実を賛美します。「神様すごい、明先生バンザイ」と、言葉に乏しい子供のように叫びたい私なのです。

# 01 羽鳥明先生を憶えて。

Remembering Akira Hatori

03



写真提供：太平洋放送協会

## 羽鳥明先生を憶えて

岸本 紘

Hiroshi Kishimoto

聖書宣教会 理事長

羽鳥明先生の九十六年の生涯は、キリストの福音のために燃焼し尽くした濃密な日々でした。少年時代の私は両親が先生のことを話すのを耳にしました。アメリカから帰って「ラジオ牧師」という珍しい奉仕を始めた先生がおられるとか、恩師沢村先生のお嬢様と結婚なさったのだとか、切れ切れの断片となって今も思い出されます。著書「イエスはわがいのち―羽鳥明自叙伝」を改めてひもとくと、「十六歳のあの日」に始まった年月は目まぐるしく展開し、まるで使徒パウロの伝道旅行記を読むような思いになります。

先生のラジオ説教は、譬えようもない温かさ、気品、神の聖さと憐れみ、キリストの愛と十字架の輝きが、短い数分間の中に平易かつ明晰に語られ、聞く人々に主への信仰をもたらしめました。神学生や若い牧師の中には、その深夜放送で信仰に導かれた人たちもいて、先生の語り口をまねて悦に入ったり、つたない説教原稿を一方的に先生に送りつけて添削を求めたりする人々もいました。

先生は、若い時から超教派の働きを中心にいて、戦後日本の福音的諸教会を結束させ牽引されました。一九六七年ビリー・グラハム大会で、グラハム師との高低差を補う台に乗って名通訳をなさった先生の姿が、大学生であった私の記憶に焼き付いています。諸方面で指導的役割を担った先生は、強引でなく常に謙虚でしたが、過密な働きのため健康のリスクを負うこととなり、しばしば大手術を経験なさいました。

先生はまた、生涯の友、舟喜順一師、 دونالد・ホーク師とともに「聖書神学舎」を創設されました。聖書信仰に立ち、来年六十周年を迎える神学舎は、先生方の主への信仰と情熱を継承して行きたいと願っています。

羽鳥先生ご担当の我々の「説教演習」は、ご多忙のため一回で終わり、今は亡き君だけが粗上に載せられました。先生は彼をひたすら褒めてくださいました。幸せなときでした。栄光は主に！

## 02 キャラバン伝道報告 Caravan Reports

キャラバン伝道実習のためにお祈りくださり感謝いたします。無事に5チームすべてが全日程を終えて、恵みのうちに帰ってこれることができました。今年度のキャラバンは「みことばを行う」ことをテーマに備えてきましたが、それぞれが、まず、みことばに支えられ、励まされて、仕えることを学ぶキャラバンとなりました。

藤本 仕光

Shiko Fujimoto

2017年度 キャラバン実行委員長

### ④ 福音交友会 岸和田北聖書教会（大阪府）

7月24日(月)–30日(日) 藤本仕光、國分力、岡村建

「岸和田だんじり祭り」に代表される、地元への愛、住民の結束が深い土地での開拓伝道を見る機会は大変貴重なものとなりました。地道な種まきが、そのときはどのような意味を持つかわからなくとも、主に用いられるという証をたくさん見せていただきました。

キャラバン隊の主な奉仕は、トラクト配布と中学生集会の企画・実施でした。祈りつつ備えていると、中学生が21名集められ、福音を語る場も与えられました。主日の礼拝説教と証も守られました。

一番の恵みは、教会の方々との交わりです。たくさんの出会いの中、どなたも救いの証しを生き生きと語ってくださり、その度に神様の御業をあがめ、ほめたたえました。教会は救われた人々の集まりであり、いつも、主のしてくださったことを語り合う場所であるという一面を教えられました。



### ⑤ 日本福音キリスト教会連合 国分寺キリスト教会（香川県）

7月14日(金)–24日(月) 阿部真知子、長澤和裕、丸毛順枝

「あなたが私とともにおられますから。詩篇23:4c」

キャラバン伝道実習の背後で、祈りをもってお支えくださりありがとうございました。たくさんの方々の祈りを感じずにはられない期間でした。

高松市近辺の四教会に関わりました。新会堂に向けて動き出した教会、4月から新たな開拓をはじめた教会、初めて子ども集会を持った教会に遣わされました。礼拝での証、賛美、説教、祈祷会でのみことばのお奨め、子ども集会、トラクト配布などの奉仕を行いました。

香川の地は、四国八十八箇所巡りのお遍路さんの地です。異教文化の真っ只中にあるそれぞれの教会が、その地と人とを愛し、神様から委ねられている働きに、真摯にお仕えしている姿に教えられ、励まされました。共に神様に奉仕し、主にある交わりが与えられた、幸いなひと時でした。



## ① 福音バプテスト宣教団 康阜聖書教会 太平チャペル (北海道)

8月2日(水)–8日(火) 杉本信、重田岳史、中村愛希子

教会の英会話教室や祈祷会、そして主日礼拝に参加し、そこで賛美と御言葉の奉仕をしました。また、教会の牧師が運営している精神障がい者のためのグループホームを訪問し、演劇を披露する機会が与えられました。また教会周辺地域でのトラクト配布をいたしました。2005年の開拓以来、牧師先生がたが続けてこられた働きに、わずかながら参与させていただけたのはとても感謝でした。

土曜日に催した子どものデイキャンプには、最初は誰も参加者がいませんでしたが、その日に公園で仲良くなった子ども3人が急ぎよ参加してくれました。また、教会にある寮で生活している留学生二人との交わりも与えられ、短い時間ながらゲームと賛美、またメッセージの時間を持つことができました。

終始笑顔の絶えない、奉仕の喜びにあふれたキャラバンでした。



## ② 同盟福音基督教会 天白キリスト教会 (愛知県)

7月15日(土)–23日(日) 山下亮、福井純子、吉田真太郎

「準備は大丈夫だろうか」という不安と、「必ず主が成し遂げてくださる」という期待を抱きながら、私たち3人は天白キリスト教会へ車で向かいました。

奉仕内容は、主日礼拝奉仕(説教、奏楽、証し)、祈祷会での説教奉仕、ハレルヤクラブ(小学生向け)、ティーンズクラブ(中高生向け)のメッセージや奏楽といった奉仕や、根尾クリスチャン山荘でのワークキャンプです。全てが良い学びと訓練の経験となりましたが、特にハレルヤクラブにおける主の御業が印象に残りました。主は、50名以上の子どもたちを送ってくださり、みことばに耳を傾けるようにしてくださいました。

私たちの準備や計画をはるかに超えて、全ては主が先立って整えておられました。その主の宣教の御業に加えていただいたことを主に感謝しつつ、学びや奉仕に励み続けます。



## ③ 日本バプテスト宣教団 伊勢バプテスト教会 (三重県)

7月17日(月)–24日(月) 岩崎互太郎、木下奈津子、金在賢

期間中は、谷口峰夫先生・宏子さんご夫妻をはじめ教会員の皆さんから様々なお心遣いとお交わりを頂きました。

私たちの主な奉仕は、教会周辺のトラクト配布、教会学校キャンプと中高生集会でした。キャンプでは、参加した子どもたちが語られたみことばに対して積極的に応答していこうとする姿が印象的でした。中高生集会では、進路について信仰の証しがなされ、恵みを分かち合うひと時でした。また道方(南伊勢)集会、祈り会、家庭集会に出席しました。それぞれの状況の中で、なおも主にお従いしようとする姿に励まされました。

伊勢神宮を見学する機会が与えられ、伊勢における宣教の課題を教えられ祈られる時となりました。

今回のキャラバンを通して、たとえすぐに実を結ぶ働きではなくとも、たゆみなく宣べ伝える大切さを実感させられました。



三浦 譲  
Yuzuru Miura  
聖書神学舎 教師

今年のテーマは「新約聖書における旧約聖書引用」でした。講座の前日に牧会する教会に急な問題が起こり、私はなんとか最終日の自分の発表を務めたにすぎず、コーディネーター(?)の役目を十分に果たすことができませんでした。この報告も鞭木先生のメモを見ながら書いている次第です。

講座の第一日目は赤坂泉先生のエレミヤ書1章9-10節からの礼拝メッセージで始まり、続く講義はエペソ人への手紙4章7-8節における詩篇68篇18節の引用問題でした。詩篇の「みつぎを受けられました」がエペソ書では「賜物を分け与えられた」となっています。詩篇の「受ける」は「与える」ことを前提としての「受ける」なのではないか、と議論されました。鞭木由行先生はマタイによる福音書12章18-21節におけるイザヤ書42章1-4節の引用問題を扱われました。マタイの用いたテキストは七十人訳のイザヤ書のテキストとも大きく違うのですが、鞭木先生は、マタイがイザヤ書を成就した文脈としてテキストを扱っているのではないかとされます。

第二日目は、津村俊夫先生が新約聖書における旧約引用と言及の問題に触れながら現代の聖書学の問題点を講義してくだり、その後半は特に詩篇89篇36-37節と黙示録3章14節; 19章11節との関連についてでした。これまでその関連性が指摘されてこなかった中で、聖書全体の中で共有されていた概念が黙示録において結集されているということでした。横山昌英先生はローマ人への手紙15章1-6節における詩篇69篇9節の引用問題を取り上げられました。新約における信仰理解の相違による問題解決という文脈の中で、模範としてのキリストが指し示される時に義人の苦難を示す旧約のことばが引用されます。なぜそれがキリストを指し示すのか、また旧約が引用される意義、役割についてもお話しされました。

第三日目は、私が使徒の働き4章23-31節における詩篇2篇1-2節の引用問題を取り上げました。詩篇全体のイントロダクションとしての詩篇2篇とダビデの関係、またルカ文書全体と詩

篇2篇の関係などを、使徒の働き4章における弟子たちの置かれた状況とともに考えました。最後の総括は、鞭木先生が上記のように各先生の発表をまとめてくださった後、私がK. BerdingとJ. Lunde 編集の*Three Views on the New Testament Use of the Old Testament* (Grand Rapids: Zondervan, 2009) の「序」の部分を紹介しました。最近福音主義内においても新約における旧約引用の理解の仕方が異なるからです。本書ではW. C. Kaiser, D. L. Bock, P. Ennsの三人が登場します。本書の「序」の部分では、*sensus plenior*(より完全な意味)や予型論の問題、旧約の文脈を考慮するのかといった問題、ユダヤ的解釈や現代の我々の釈義的アプローチとの関連など、この分野での議論を理解するための予備的情報が紹介されています。

最近Ennsのように旧約で意図された意味と新約で意図される意味が必ずしも一つではないといった主張が見られますが、やはり一つの意味を認めなければと思います。しかしそれでも、旧約著者が示した対象が新約著者の示す対象と全く同じものなのか、新約においては新しい対象をも示しうるのか、福音主義内においても解釈の分かれるところです。説教の準備のためにはG. K. BealeとD. A. Carson編集の*Commentary on the New Testament Use of the Old Testament* (Grand Rapids: Baker Academic/Nottingham: Apollos, 2007)をお薦めしますが、それでもこの度の先生方が講義なさったような詳細な説明は載っていません。今回示されたように、やはり各自が旧約と新約のそれぞれの文脈を考慮しつつ、旧新約それぞれのテキストに地道に向かっただけでいかなければ、我々が真に聞きたいことを引き出すことはできないように思います。そして最後に、その注解書が示しているように、この分野は実際は“The New Testament Use of the Old Testament”なのです。「旧約引用」ではなく「旧約使用」となっています。そこらあたりに、新約における旧約の扱われ方の深さが潜んでいることを改めて考えさせられています。

## 神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた

伊藤 暢人

Nobuhito Ito

聖書神学舎 教務主任

聖書神学舎を祈り支えてくださる諸教会の皆様、お元気で過ごしてでしょうか。

四月十日に創設者の一人である羽鳥明先生が召天されましたが、それに続いて六月一日には教会音楽専攻の講師である遠藤かおる先生が若くして主のみもとに召されました。長い闘病生活でしたが、その中でも主の恵みとまことを証してくださいました。今回の通信でお二人の先生を憶えて、思い出の言葉を寄せていただきました(二一三ページと八ページ)。ご遺族やご関係の方々には主の特別な慰めがありますようお願いいたします。

### 通信刷新

前号から通信の紙面を一新いたしました。以前のあの濃い紙の色とタイトル字がお好きだった方もおられると思いますが、より明るくカラフルにイメージチェンジさせていただきました。写真が多くなり全面カラーになったことで読みやすくなったという評価をいただくとともに、経費面で心配してくださる声も聞かえてきました。しかし、版下原稿をこちらで完全に作ることで昨今の印刷技術の向上のお陰で、実は制作費は以前よりも低く抑えられています。それでいてページ数増なのです。より安く、より充実した内容をお届けしたいと思えます。

### 学舎近況

夏といえばキャラバン伝道と夏期研修講座です。いずれも詳細はそれぞれの紙面で報告させていただきましたが、キャラバンについては特に受け入れてくださった五つの教会に心から感謝いたします。伝道実習の場として意義ある訓練をいただくのは勿論のことですが、それとともに、諸々の経験や具体的な出会いが研修生たちにとっては有形無形の財産になっていきます。続けての祈りの交わりがあれば幸いですし、直接関係のない皆様も紙面を通して加わっていただければ感謝です。

また教会音楽夏期講習会は、今年も各地から三十八名の参加者を迎えて祝福のうちに終わりました。「みことば

と音楽―賛美―というテーマで、午前中にみことばや教理について講義があり、午後は分科会に分かれて聖歌隊指導や歌唱、声楽、オルガンなどの実習、さらには夜にも演習や交わりがあるという充実した三日間でした。諸教会の礼拝や賛美が神へのささげ物としてなお一層整えられるように、またそのために用いられますように願ってやみません。

### 秋に向かつて

皆様のお手元にこの通信が届く頃には、もう前期の授業が再開されています。十月五日の前期終了に向けてすべての学びが守られますように、お祈りください。さらに二週間の秋期調整期間を経て、十月十九日から後期が始まります。卒業予定者にとってはよいよ卒業論・卒研の学びが本格化する時であり、また卒業後の働きを祈り備える季節でもあります。どうぞすべての学びと訓練が用いられ、研修生一人ひとりがみことばの奉仕者として育てられていきますようにお祈りください。

### 神の国と主イエス・キリストを

使徒の働きの最後で、囚われの身となりながらローマに着いたパウロでしたが、彼は訪ねてきたユダヤ人たちに「朝から晩まで語り続けた」とあります。何を語ったのか？「神の国のことをあかしし」、旧約聖書によって「イエスのことについて彼らを説得しようとしたのです(二八:二二)」。みことばの知識が結実しているだけでなく、何としてでもそれを伝えずにはいられない宣教の情熱があります。同じテーマについて、彼はその後の二年間も語り続けました。「…大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」(二八:二三)聖書神学舎の学びと訓練が、このように知的にも霊的にも人を福音に生かすものであるようにと思われたい。またそのために、教壇に立つ教師たちがまずそう在らせていただきたいと願います。どうぞお祈りください。皆様のご支援に感謝しつつ。

# 遠藤かおる先生のこと

飯島 千雍子  
Chigako Iijima  
聖書神学舎 教師

「24人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。『主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。』」(ヨハネの黙示録 4章10、11節)  
「それゆえ私は生きていかざり、あなたをほめたたえ、あなたの御名により、両手を上げて祈ります。」(詩篇63篇4節)

昨年の教会音楽夏期講習会、ミニ講習会で遠藤かおる師が賛美についてお話ししてくださいましたとき、朗読されたみことばです。

かおる師との出会いは彼女がまだあどけない小学生の頃、松原湖のキャンプでした。そのキャンプで賛美への思いが与えられた、と聞いています。次は、音楽大学を卒業し献身、教会音楽舎に入会されたとき、明るく健やかな声と笑顔で賛美へのまっすぐな思いと神さまの導きを話してくださいました。賛美の声は本当に高らかに響き渡りました。遠藤勝信師との結婚に導かれやがて、今度は教会音楽同労の仲間としてともに主に仕えることができました。大学での専攻が同じ声楽で共有共感できることも多くありました。本科でも教会音楽実習を担当され、一人ひとりの必要に合わせて指導されました。立川で始まった教会合唱講座もともに担当してくださいました。賛美の姿勢を皆さんに篤く伝える指導は、研修生からも受講生からも慕われていました。

立川の合唱講座では奨励を担当して下さいましたが、よく準備され静かにみことばの教えを語られる声を聴きながら、神様がこの方に語る賜物を特別に与えられているように思っていました。

病との闘いは想像を絶するものだったと思います。その中で、主から力をいただいて、主をほめたたえ、祈り、みことばを歌い、主に栄光を帰された生涯を通して多くの方が励まされています。主の聖名をたたえます。

## ● 聖書宣教会からのお知らせ Information

### ● 「オープンデイ」のお知らせ 11月4日(土)

オープンデイは、授業や礼拝にどなたでも出席いただける「公開授業」の日です。申込は不要です。見学などの機会として是非お用いください。皆様のおいでを心よりお待ちしております。  
(内容については、当日変更となる場合もあります。)

### ● 「賛美礼拝」のお知らせ 11月25日(土) 14:30

「福音 ～宗教改革500年を覚えて～」

聖書：エペソ人への手紙 2章 1～10節  
説教：赤坂 泉（聖書宣教会 主任牧師・校長）  
曲目：

- ・ 救いはただ主の恵みの賜物 Paul Speratus, H.Wolf, J.S.Bach
- ・ Max Reger: 52 Chorale Preludes, Op. 67: No. 10, Es ist das Heil uns kommen her
- ・ 創作賛美歌
- ・ あゝ、照り輝くヤコブより出でしM.Praetorius 他

	I～II 8:20～9:55	10:00～ 10:30	III～IV 10:40～12:15	12:15 ～
1年	教会史 (若井 和生)	チャペル (久利 英二)	組織神学II (神論) (鞭木 由行)	簡単な 昼食の 提供が あります (無料)
2年	旧約釈義I (鞭木 由行)		組織神学IV (キリスト論) (赤坂 泉)	
3年	宣教学II (異教・異端) 牧会学III (教会組織) (赤坂 泉)		組織神学VII (終末論) (横山 昌英)	
4年	旧約研究IV (津村 俊夫)		新約研究II (使徒の働き) (三浦 謙)	